

ドイツ研修雑感

【はじめに】

副団長という立場でドイツの研修に参加させていただくことになった。団長にもしもの不慮の事態が起きた場合の代役という比較的フリーな立場ということもあり、挨拶の準備と覚悟だけはしつつも、肩の力を抜いて研修会に臨むことにした。研修会の個人的なテーマとして、「堅牢性」に焦点を絞ることにした。

【行動変容の多理論統合モデル（TTM）】

大学の教員である筆者の研究の興味関心は、「人は何故、運動やスポーツをしなくなるのか？」にある。「継続」というキーワードを出発点として、Addiction（中毒）と Exercise（運動）に関する文献を調べているうちに、トランスセオレティカルモデル(TTM)に辿り着いた。

TTMは現場への介入を前提とし、一つ以上の複雑な問題を持った者に対処するために、有効なモデル一つに拘ること無く、有効なモデル間を行き来（Trans）できるようにして効果的なものはすべて使ってしまうというモデルである。モデルを提案した Prochaska 博士は、自分自身が専門としてきた一つの心理療法モデルを用いた結果として、アルコール依存症だった自らの父を救えなかったという事実を受け入れ、行動を変えることができないのは本人の意志の力や動機付けの不足が原因としてきたこれまでの活動志向のアプローチを改め、その人の現在の準備性（ステージ）に見合った正しい戦略を用いることを前提とするステージ志向の TTM を提案している。

【ステージに内包されるもの】

TTMの中核となるモデルは、ステージモデルである。実際に横断的、縦断的に TTM を用いた評価してみても何故、Prochaska が複数の指標（モデル）を用いて運動行動のステージの評価をすることを提案したのかが分かってきた。多様な指標による評価が示していたのは、「現在運動をしていないし、今後もしるつもりはない」と答えた人々が内包する中身は同じではないということであり、同様に、「現在運動をしているし、これからも継続していく」答えた人々の中身も同じではないということであった。前者の中には、過去に運動をしていたが、様々な経験や知識を得た結果、現在運動をしない事を選択した人もいれば、完璧な知識を集めることに終始して実際に一歩踏み出す事の無かった人、運動できないのは全てが自分に原因があると思込んでいる人、全てが環境のせいであると思込んでいる人もいる。一方で後者の中には、過去に運動をしていなかったが、他の活動で得てきた様々な経験や知識を元に、現在運動する事を選択している人もいれば、現在抱えている問題や負担を直視することなく運動を継続している人もいる。つまり、その人が現在採択している行動の中には、様々な過去の多様な経験が折り畳まれて存在しているのである。

【離島の研究】

今回の研修において筆者がテーマを絞った背景には、福島県において、底辺からの競技力の向上を目指した「うつくしまスポーツキッズ発掘事業」に5年間、生涯スポーツ社会の実現という側面からの、「子どもたちが興味関心に応じてスポーツに親しむことのできる環境の整備」に3年間、その後3年間、うつくしま広域スポーツセンター企画運営委員会の委員長を務めさせていただいてきた経緯で感じていたことがある。いずれの立場においても、時間をかけてコンセンサスを得るという方法ではなく、全体の方向性を見極めた上で、時間をかけて関係者間の妥協点を探し、新しい知見を協力して見いだしていくという方法をとってきた。その背景にあったのは既存の組織の「堅牢性」である。

ちょうど企画運営委員会の委員長を任されたのと時を同じくして、健康心理の先生に誘われ、健康観の高いとされる島と低いとされる島を抽出し、現地での調査研究を行った。離島は少子高齢化が進行した後の日本のモデルでもある。健康観の低い要因として浮かび上がってきたのは、限定されたネットワークがもたらす、強固すぎるサポートの存在であった。逃げ場がないのである。

「回避」する構造を持つことは弱さや未熟さを意味しない。問題が生じることを未然に防ぐ機能が含まれている。行き来できる回り道を通して多角的な視野を広げて恩恵感を感じ取り、課題を克服するための資源を増やす事で、寛容さを身につけ、課題に対峙する力を得る。回り道を通して人は成長をする機会を得る。

【行き来 (Trans) する人材】

今回のドイツ研修全体を通して、ライン・ノイス郡スポーツ相談課のアクセル・ベッカー氏に大変お世話になった。行く先々における彼の対応からは、それぞれのクラブや関係者と定期的にコミュニケーションをとり、専門的な知識とスキルを熟達させてきた様子が伺えた。

筆者は、講義で説明について違和感を感じたので(現場を見た訳ではなかったのですが氏の説明に対して)、移動のバスの中や食事中に、ズケズケと不躰な質問を幾つかしてしまった。ベッカー氏からは最初、困惑したような回答をいただき、なんとなく気まずさが残っていた。しかしながら翌日の食事後、落ち着いた時間を見計らってベッカー氏から配慮に充ちた言葉をかけてもらい、氏の細やかな心配りに感動を覚えた。

また、通訳を務めてくださった多田さんの洗練された翻訳能力の高さに何度も助けられた。彼が持つ語彙そのものの数も然ることながら、双方が意図する話しの内容を汲み取り、ドイツにおけるクラブの構造と背景にある哲学と照らし合わせながら言葉を選んで伝える高い力のお陰で、研修は非常に有意義なものとなった。移動の道すがら、多田さんの専攻について少しお聞きすると、ヘーゲルについて学んでいるということであった。

【止揚と無謬】

隣の研究室の社会学の先生が、ヘーゲル哲学を用いて介護問題に取り組んでいる事を思い出し、ヘーゲルについて調べてみた。ドイツ最大の哲学者であるヘーゲルの弁証法には、止揚という概念がある。これは、矛盾する諸要素の統合的な発展のことを言う。ヘーゲルは対立や否定を重ねながら様々な価値を統合し、共同体に属する人たちの共通の心構えを作り上げていけるような社会を目指していた。しかしながらその後、ヘーゲル哲学は絶対的理想社会の構築に繋がり、法や国家、組織の無謬性(決して誤りの無いこと)を生み出す危険性を孕むことを指摘され、「ねばならない」価値観からの解放と、弱くある事の自由が叫ばれるようになった。

上記のような背景があるからだろうか。訪れたノルトライン・ヴェストファーレン州においては、スポーツの権利は法により保証されていない。地域住民は自発的な活動による「可能性」が担保される道をとった訳である。一方で、バイエルン州においては、法でスポーツの権利が保証されている。こうして捉えていくと、ドイツにおける地域の公益を担うクラブという志向性は、実に深い。常に動的なのだ。多田さんはこうも言われていた。「未だヘーゲルを良く理解できていない」と。クラブの独自性と社会そのものが持つ多様性は二律背反する部分を含みつつ絶えず存在していく。他者が持つ哲学の良さを包み込むような変容を成し遂げていくには、そこに専断的に携わり、行き来する人の熟達化がキーとなるであろう。地域のクラブ内外のネットワークを行き来し、「楽しみ」や「幸せ」を運ぶために必要な資質として、それぞれの関係性をもつ複雑性や両極性、柔軟性を内包する哲学を個人内、そして関係する団体内でダイナミックに発達させ続けていく「開放性」もまた、必要であると思うに至った。

「ケーゲル」(ドイツボーリング)

ルールを変更し、多様なゲームを楽しむ事ができるスポーツ。

一体、誰がどのような経緯で考案したのだろうか。

